

Janice Frye-Pierson, James F. Toole 編著

藤島 正敏, 長尾 哲彦 訳

脳卒中 ― 患者と家族の手引

(A 5 236 頁 3,708 円 (税込み) 1989 年 医学書院 刊)

横山 巖

(七沢リハビリテーション病院脳血管センター)

この本は、脳卒中の患者と家族の手引書として、アメリカのボーマン・グレイ医科大学神経内科のツール教授が、同科の看護婦ピアソン女史とともに編著者となり、理学療法士、言語病理学者、リハビリテーション科の看護婦、心理学者、建築家、眼科医学等の協力の下に書かれた本を、九州大学内科の藤島正敏教授と長尾哲彦氏が翻訳されたものである。

患者と家族の手引との副題にかかわらず、この本は大変広い視野の下に書かれたレベルの高い本であり、脳卒中のリハビリテーションに携わるすべての関連職にとって必要な広い範囲にわたる貴重な知識が要約され整理されている。

まず脳卒中の定義、原因、危険因子に始まって、脳の解剖、一過性脳虚血の症状、患者の診察と基本的な検査、基本的な治療法が前段で述べられている。患者と家族の手引書としてはかなりレベルが高いと感じたのは、例えば一過性脳虚血の症状を内頸動脈系と椎骨動脈系に分けてきちんと記述して

あることである。ところで、この本の良い点の一つに、原著の内容に問題があるときには訳者注として読者に誤解を与えないような附記がなされていることである。例えば、「TIA や RIND では CT や MRI で梗塞所見を認めない」、「脳出血を止めるためには血圧を正常近くまで下げなくてはならない」などの記載にはいずれも適切な訳者注が附記されている。

前段にひきつづいて、リハビリテーションの過程における心理的問題、PT の基本的な訓練と身のまわり動作訓練について、自宅の改造、言語障害、空間認知障害、排尿排便障害、さらに性の問題、生活の援助とつづき、研究の展望に終わっている。これらの項目はいずれも最近のわが国の脳卒中リハビリテーション医療従事者の間で関心の高まってきている問題である。尿失禁の対応の仕方には詳しい記載があるが、留置カテーテルを入れておけばよいなどとはどこにも書いていない。この項は是非多くの人に読んでもらいたいも

のである。失語症患者への対応の仕方も詳しく書かれている。また性の問題に触れている成書はほとんどないので、本書の記載は有益である。この章の末尾にある「患者の存在自体が家庭に与える安心感は測り知れない価値があるのだ」と患者を励ますようにとの助言は貴重である。

終わりに、先ほどの訳者注にならってリハビリテーション医の立場から意見を附記したいことを挙げると、一つは 101 ページの「移乗の際に、車椅子のベッドに近い方の肘かけを取り外した方がよい」という記載には賛成しかねる。片麻痺者の移乗法は対麻痺者とは異なり、いったん起立するので肘かけを取り外す必要はない。あと一つ、117 ページの「一度肩亜脱臼が生ずると整復することはできない」という点も問題で、“高度の”亜脱臼というただし書きが必要であろう。

一読して感じたことは、大変良い本であるということで、患者と家族以外にも、脳卒中患者に接する看護婦さんには是非読むことをおすすめしたい。そのほか、脳卒中患者を多面的に理解するという意味で、すべてのリハビリテーション医療関連職の方々にもおすすめしたい本である。